



TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学大学院 国際文化研究科



GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報

No. 32

July 2019

Contents

- 02 研究科長メッセージ
- 03 日本学国際共同大学院
- 05 「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラム(略称G2SD)の開設
- 07 国際文化研究科主催「東北大学SDGsシンポジウム」開催
- 09 災害科学・安全学国際共同大学院プログラム
- 10 修了者からのメッセージ
メスロピヤン メリネ さん
島貫 悟 さん
- 11 退職教員からの言葉
山下 博司 教授
葉 剛 教授
- 12 新任教員紹介
泉 貴子 准教授
土屋 陽一 准教授
大窪 和明 助教
- 14 最近の著作から
- 15 科研費採択一覧
- 16 INFORMATION
 - キャリア講習会
 - 第25回公開講座
国際文化基礎講座:
「世界で今 何が起きているか」
 - 外交講座:
「アジアにおける日本外交」
 - 入学試験情報



研究科長メッセージ

国際、学際、そしてその先へ

国際文化研究科長 高橋 大厚



国際文化研究科は、人間がその活動により産み出す「文化」、その文化の場となる「社会」、文化を媒介する「言語」を、国際的、学際的な視点・手法により研究し、その成果を教育に還元し、次の世代の研究の担い手を養成する研究教育機関です。「文化を国際的な視点から研究」したり、「社会や言語を学際的に研究」するとはどういうことか、明確なイメージを持つことは言葉で表すほど容易ではないかもしれません。

例えば、日本文化を例にとってみましょう。これは文字どおり、日本というローカルな地域に生まれ、そこに住む人々により共有されている文化です。その文化の担い手たちは自分たちの文化について、時に意識的に、時に無意識に、ある特定のイメージを持ちます。現代は、インターネットや輸送手段の発達により、情報が瞬く間に世界中を飛び回る時代です。このような中では、日本文化も外国で紹介され、受容や批判にさらされます。日本に住む担い手が考える日本文化と、国外の人たちから見た日本文化は同じものなのでしょうか。あるいは、日本文化が外国で受容されるとき、その受容されたものは元の文化と同じものなのでしょうか。さらには、日本文化を異なる文化と比較したときに、それらの間には普遍性は存在するのでしょうか。これらの解はいずれも、一つの文化をその「外側」を意識しつつ考察することから可能になります。

今日の社会的課題である環境問題はボーダーレスです。ある国で発生した問題がいくとも簡単に、人間が人為的に策定した国境を超え別の国、地域に影響を与えます。その解決には国際的な協調が求められるかもしれません。問題の源となっている物質の化学的な特定や、関わる国や地域の文化、経済、政治状況を理解することも必要かもしれません。まさしく、「国際」であり、「学際」が必要とされます。

また、文化の表現・伝播において重要な役割を演じる言語が人間の脳により生み出されるものであることに疑う余地はありません。そうだとすると、言語を脳科学的な視点から、つまり学際的に研究することは極めて自然なことと言えます。日本語の尊敬語では、尊敬の対象となる人物が主語として表されたときにそれに合った動詞の形が用いられます。例えば、「学生が本を読んでいる」に対して「先生が本をお読みになっている」という例文にそれを見ることができます。言語学では、この主語と動

詞の呼応を、英語などに観察される主語と動詞の一致の一種であるという考え方があります。その検証の方法は様々あるでしょうが、一つには、日本語話者が尊敬語を処理しているときの脳活動と英語話者が主語・動詞の一致を処理しているときの脳活動を比較し、どのような部位が使用されているかを調べることが考えられます。日本語という言語はどのようなものか、あるいは人間という種の脳が生み出す言語とはどのようなものかという問いに新しい光をあててくれるかもしれません。

上記のような研究の成果を教育に還元する新しい取り組みとして、本研究科は今年度から1つの国際プログラムを立ち上げ、2つの共同大学院で学生の受け入れを始めています。

「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムは、英語を教授言語とし、4月と10月に学生を受け入れます。先行する国際プログラムである言語総合科学コースに次ぐ本研究科2つ目の国際コースとなります。国際環境資源政策論、国際政治経済論、多文化共生論、アジア・アフリカ研究の4つの講座から教員が参加し、多角的な視点から教育・指導が行われます。研究科にとどまらず、東北大学全体の「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals (SDGs))」教育の中核を担うプログラムに育つことを期待しています。

「日本学国際共同大学院」と「災害科学・安全学国際共同大学院」は、それぞれ複数の部局が協力し、1つの研究科だけでは実施が難しいような、より複眼的、学際的なカリキュラムを提供しています。海外の大学との連携も組み込まれており、所属学生は留学や研修、インターンシップなどを経験し、それを学位論文や修了後のキャリアに活かすことができます。

国際文化研究科は、既存の組織に上記のような新しいプログラムを組み込みながら、より多様な学問的関心を持つ学生諸君、ひいては社会からの要請に応えます。2018年11月に東北大学は「東北大学ビジョン2030」を公表しました。これは、2030年を見据えた、本学が取り組むべき挑戦と課題達成に向けての施策をまとめたものです。その上位概念に「最先端の創造」という言葉が謳われています。ある事象を従来の枠にとらわれず、より多角的、学際的な視点から研究するときに「最先端」は生まれます。本研究科は、「国際」と「学際」を追求し、東北大学ビジョンの実現に貢献します。

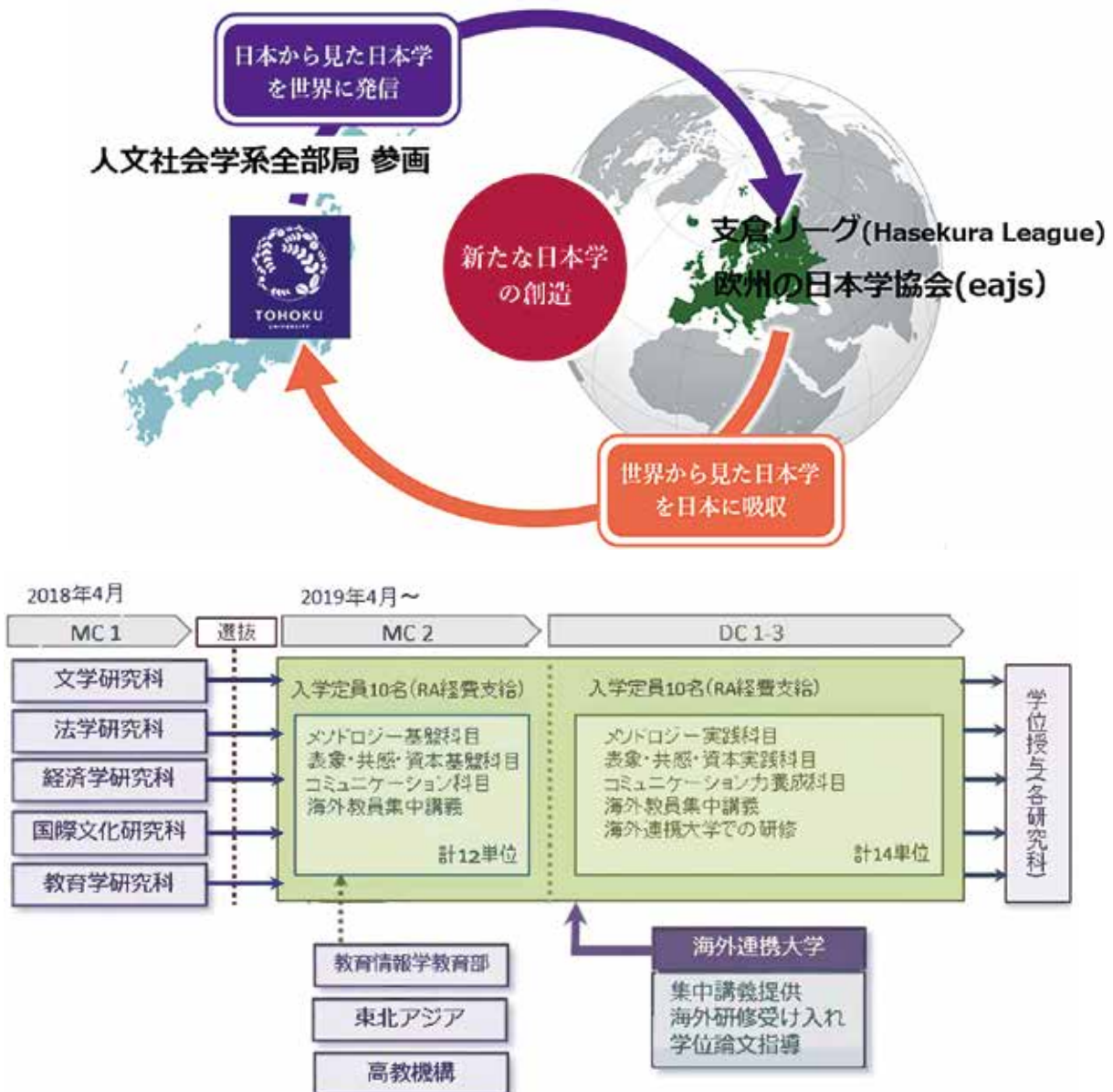
日本学国際共同大学院

今、日本の大学で「日本学」が静かなブームになっています。日本独自の文化や歴史に重点を置いたこれまでの日本研究の枠組みを超えた、国際的・学際的な視点からの総合的な日本研究です。本研究科では、長年、東アジアの主要大学と日本学の学術交流、特に学生の研究発表を主体にした国際共同教育ワークショップを実施し、2015年には国際日本研究講座を新設し、新たな日本研究を推進してきました。

今年度、本研究科をはじめ東北大学人文社会系の全研究科が参画する博士前期・後期課程一貫の共同大学院学位プログラ

ムである日本学国際共同大学院が発足しました。海外の大学と連携し、「表象」「資本」「共感」という切り口から多面的かつ創造性に富む日本学のプラットフォームを構築することで、「日本から見た日本学」を世界に発信し、「世界から見た日本学」を日本に吸収するという新しい日本学の創造を目指しています。詳細は、

本学ウェブサイトの日本学国際共同大学院 (<https://www.sal.tohoku.ac.jp/gpjs/>) をご参照ください。



国際学術会議

The First Tohoku Conference on Global Japanese Studies

日本学国際共同大学院は、国際文化研究科、文学研究科、教育学研究科、法学研究科、経済学研究科、東北アジア研究センター、および高度教養教育・学生支援機構が連携して先端的な日本学の研究を進め、その成果を大学院教育に活かすことを目指して設置されました。そのための重要な事業として、国際レベルの学術会議を東北大学で開催することを掲げています。その最初の会議The First Tohoku Conference on Global Japanese Studies が、2018年12月14日～16日に開催されました。

「明治維新再考：文化、歴史、国家」を全体テーマとして行われたこの国際会議では、基調講演者としてJames Ketelaarシカゴ大学教授と桐原健真金城学院大学教授が登壇し、ヨーロッパ、北米、アジア各国から参加した20名以上の著名な研究者が日本学の各領域で質の高い研究報告と活発な討議を行いました。このような国際的な日本学の研究交流活動を通して国際共同大学院の研究を国際水準に高め、本学の日本学の国際的プレゼンスを向上させることを目指しています。

社会にインパクトある研究「創造する日本学」

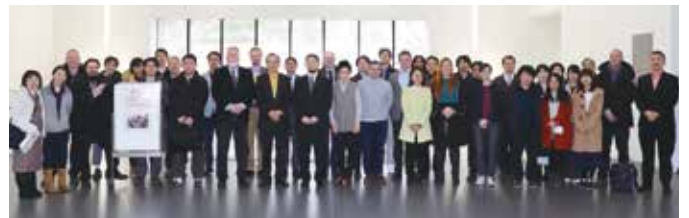
国際文化研究科は、文学研究科、東北アジア研究センターと連携して、東北大学が創設したプロジェクト「社会にインパクトある研究」に「創造する日本学」という研究プログラムを提供しています。「社会にインパクトある研究」は、大学が社会に貢献するしくみを産学連携を軸に実現させていこうというもので、「創造する日本

学」では、新たな日本学の価値創造を目指して研究に取り組んでいます。すでにプロジェクトは3年目に入りましたが、この間、国際会議で海外の先端大学との共同研究の成果を発信するなど、日本学の国際発信力を高め、社会へインパクトを与える研究を目指した取り組みを進めています。

国際日本学コンソーシアム

最近、「国際日本学」がちょっとしたブームになっています。本研究科は、2015年の改組によって「国際日本研究講座」を他部局に先駆けて設置し、その先端的な教育・研究を進める取り組みを始めましたが、現在は多くの研究所や大学院課程が「国際日本学」を掲げています。このような研究機関が相互の連携を深め、この分野のさらなる進展を図るために、国際日本文化研究センターが

中心となって、2017年に全国13機関が加盟したコンソーシアムが結成されました。東北大学からは本研究科と文学研究科が加盟しています。このコンソーシアムでは、日本学に関連するワークショップの開催、関連書籍の出版、研究プロジェクトの助成、大学院生を含む若手研究者の支援を行なっています。2020年には、東北大学を会場に国際ワークショップの開催が予定されています。





「グローバルガバナンスと持続可能な開発」 プログラム(略称G2SD)の開設

G2SDの始動

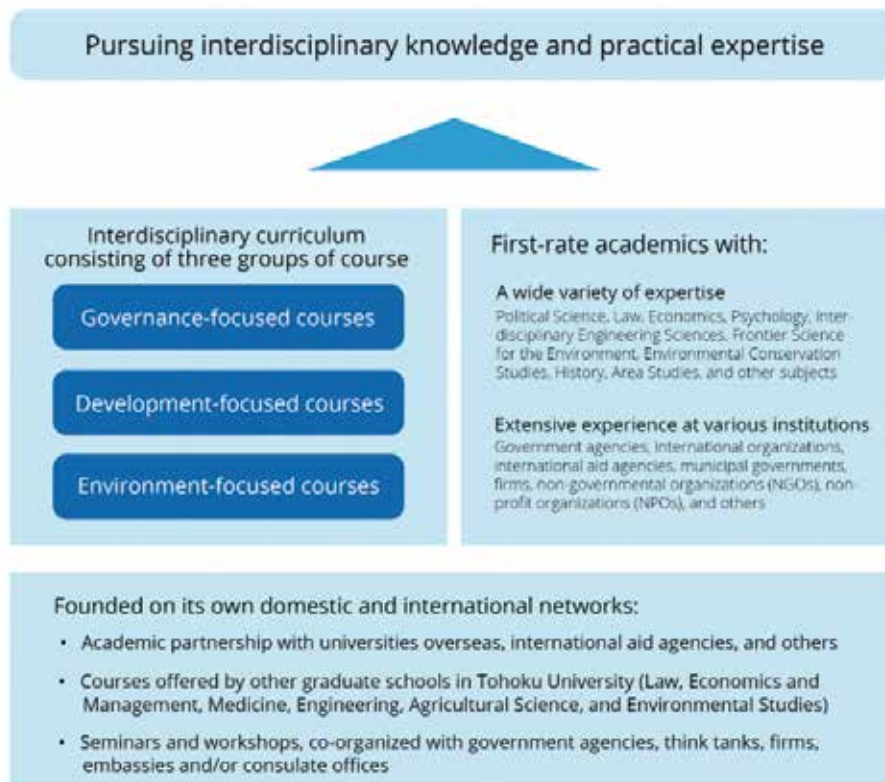
いよいよ2019年4月から、英語で学べる「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム(Global Governance and Sustainable Development)」が始まりました。これは「ヒューマン・セキュリティと社会プログラム(International Post-Graduate Program in Human Security)」を発展的に継承したものであると同時に、「言語総合科学コース(International Graduate Program in Language Sciences)」と並び、英語で学べるコースとしては2つ目になります。

今年度は一期生として、博士前期課程に3名、博士後期課程に1名が入学しました。国際環境資源政策論講座と国際政治経済論講座にそれぞれ2名ずつ所属して既に研究を開始しています。研究テーマは、フードロス、自動車リサイクル、日韓の国際関係、人道的介入です。今年度は2つの講座ですが、すでに多文化共生論講座およびアジア・アフリカ研究講座にも多くの問い合わせをいただいています。両講座に所属する学生と教員全員が参加して、4月には花見も開催されましたが、今後もさらに活発に講座間の協力と

交流を続けていく計画です。なお、国際環境資源政策論講座では協力教員として災害科学国際研究所の泉貴子先生を、そして国際政治経済論講座では新しく土屋陽一先生をお迎えして新指導体制が発足しました。

英語コースであることを反映して、国籍も多様化しました。来年度から博士前期課程に入学することを目指している研究生も含めれば、韓国、ブラジル、コロンビア、モザンビークなど、アジアのみならず世界各地から学生が集まっています。このことは、グローバルガバナンスと持続可能な開発を研究する上で必須の、グローバルな視点を養うのに大きく役立つことでしょう。

またこのプログラムは、同じく2019年4月から始まった「災害科学・安全学国際共同大学院プログラム」とも緊密な連携を保ちながら運営されます(英語での開講ですが、本研究科の一般の博士前期課程からも編入可能です)。博士後期課程を含み、数ヶ月間の留学を必須とするこのプログラムへの編入を希望する学生は、早くも今年度秋からその科目の履修を開始することになります。



【図】G2SDの特徴

■ 入学生の声

博士後期課程の学生として、G2SDの一期生として入学されたSeohee Ashley Parkさん(韓国)に志望動機、G2SDへの期待、2ヶ月を過ごした感想について伺いました。

まず志望動機として、Parkさんは、なによりもG2SDに関わる教員の研究分野や研究方法が魅力的であることを挙げてくれました。また、理論と実践を兼ね備えた研究者を目指しているParkさんにとって、理論と実践の両立を掲げているG2SDは非常に魅力的だったことも志望要因だったとのこと。

実際に入学してみると、G2SDの第一期生であることに強い誇りを覚えるとのことでした。また、G2SDには、新たな研究活動が始まる可能性に加えて、それを通じた知的ネットワークが発展していく可能性も強く感じておられました。

最後に、Parkさんは、「高い研究スキルと革新的なアイデアを備えた研究者を育成する分野横断的なプログラム」という特長を活かし、G2SDが深い専門知識と幅広い知見を兼ね備えたT型人才を数多く輩出することを期待しつつ、自分もその一人となり、理想の研究者像に近づいていきたいと語ってくれました。G2SD担当スタッフ一同、Parkさんの思いに応えられるように、精一杯の努力を行っていきたいと思います。





国際文化研究科主催

「東北大学SDGsシンポジウム」開催

持続可能な開発目標 (SDGs) の達成に向けて、グローバル人材の育成という観点から、日本として、政府として、あるいは大学、地域、企業、市民として何ができるか、とりわけ、東日本大震災など災害の経験も踏まえ、世界にどのような発信ができるか——。河野太郎外務大臣をはじめ、最先端で活躍する講演者が満席の国際センターに集い、産学官地域のそれぞれの立場から熱い議論を繰り広げました。

河野外務大臣は、最新の政府の取組を紹介しながら、国民一人ひとりがSDGs推進に取り組むことの重要性を強調しました。また、東北地方の防災の取組が世界の範となるとし、復興に政府として全力を尽くしていく旨述べました。

キャスターの国谷氏は、キャスターとして抱いていた葛藤の中でSDGsに出会った経緯、そして、SDGsを進める国内外のプレイヤーたちの言葉を紹介しながら、SDGsの根底にある理念や危機感、今後歩むべき道について訴えました。

また、災害科学国際研究所の今村教授は、東日本大震災当時、科学がどういう点で貢献できるのかを議論しました。国連環境計画・金融イニシアチブ特別顧問の末吉氏は、SDGsとパリ協定を実現するための新たな国際競争が始まっているとの時代認識や、

SDGs時代のグローバル人材に求められる素養が何であるかを訴えました。

シンポジウムに参加した小山内詩織さん(国際文化研究科 国際環境資源政策論講座 修士1年)は、「このシンポジウムに参加するまでは、SDGsの知識はほとんど持ち合わせていませんでした。しかし、話を聴き、自分も世界中の人々全員が幸せに暮らすことができる社会を創る役割の一端を担いたいという気持ちが強まりました。シンポジウムでは、大学の先生や政治家、民間企業の方々が話しをされたこともあり、様々な立場からSDGsの実現にもけた取り組みが行われていることも分かりました。シンポジウムで学んだことをこれからの自分の研究に活かしたい。」と力強く語ってくれました。

東北大学SDGsシンポジウム「持続可能な開発目標 (SDGs) の達成とグローバル人材」

主催者挨拶 大野 英男(東北大学総長)

第一部 基調講演

河野 太郎(外務大臣、衆議院議員)

国谷 裕子(キャスター、東京藝術大学理事/慶応義塾大学特任教授)

今村 文彦(東北大学災害科学国際研究所所長・教授)

末吉 竹二郎(国連環境計画・金融イニシアチブ(UNEP FI) 特別顧問、公益財団法人自然エネルギー財団副理事長)

第二部 パネルディスカッション

須藤 勝義(国際協力機構(JICA東北) 所長)

渥美 巖(宮城県東松島市長)

辰野 まどか(一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GIFT) 代表理事)

藤井 史朗(MS&ADインシュアランス グループ ホールディングス株式会社 取締役 副社長執行役員 グループCFO)

劉 庭秀(東北大学大学院国際文化研究科教授)

閉会の挨拶 小野 尚之(東北大学大学院国際文化研究科長・教授)

シンポジウム開催概要

開催日：2018年12月21日(金)

会場：仙台国際センター

主催：東北大学、東北大学大学院国際文化研究科

共催：MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社、東北大学災害科学国際研究所

後援：内閣府地方創生推進室、外務省、文部科学省、環境省、東北経済産業局、宮城県、仙台市、東松島市、国際協力機構、河北新報、MS&ADインターリスク総研株式会社



災害科学・安全学国際共同大学院プログラム

2019年春から災害科学・安全学国際共同大学院プログラム(以下、GP-RSS)がスタートしました。GP-RSSでは、災害科学・安全学分野の最高水準の教員を配置し、海外研究者の招聘や、海外連携教育研究機関との積極的な研究・学生交流を行い、学

術的分野からフィールドに至る広域的な分野において、高い専門性を有し国際的に活躍できる人材の育成を目指した実践的国際教育を行います。本プログラムで育成する人物像としては、以下の能力を有する世界トップレベルの人材の育成を目指します。



- 災害科学・安全学分野における既存の枠組みを踏まえつつ、幅広い視野から多角的に捉える能力
- 災害科学・安全学分野において対話型協働能力の習得と実践課題解決の能力
- 国際的視座と現地密着滞在型の研究交流経験を有し、その知見に立脚しながら研究成果を発信し国際的に活躍できる能力

講義は、全て英語により行われ、QE (Qualifying Examination) の導入による教育の質の保証を行います。本プログラムのカリキュラムは国際実践科目、学際基幹科目、基幹基礎科目、研修科目などで構成され、博士前期課程・修士課程から博士後期課程・医学履修課程までの一貫教育となっております。また、研修科目では、国際的に活躍できる人材育成のため、カリキュラムの一貫として、連携教育研究機関へのサマースクール派遣、海外研究派遣を実施します。また、国連大学をはじめとする世界トップレベルの海外教育研究機関と連携し、国際行動指導を行いま

す。本プログラムを修了すれば、学位記にその旨が付記されるとともに、海外連携先との協定が整っている場合には国際共同学位を証明する証書を授与します。

本プログラムでは、所属する学生が自己の学習と研究に専念できるように、経済的サポートや留学支援を行いますので、これからの安全・安心な社会の構築に向けて意欲あふれる皆様の積極的な参加を期待しております。

修了者からのメッセージ



国際日本研究講座

平成31年3月
博士課程後期3年の課程修了

メスロピャン メリネ

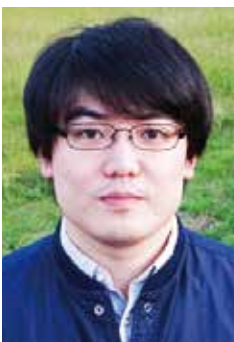
何があっても、自信を持って絶対に諦めない

2001年に高校を卒業したときすでに、アルメニアで唯一日本語学科があったエレバン人文大学を卒業したら、数年間日本に留学することを希望していた私は、長い間待ってついに日本の文部科学省の試験に合格しました。そして2011年4月に東北大学に留学することが決まり、日本への航空券を受け取ったばかりの私がテレビのスイッチを入れると、留学先の仙台が水に覆われていました。ショック！自分の目が信じられませんでした。何で日本なの？何でよりによって仙台なの？東北大学はもうきつと津波に流されたに違いないと思いつつ、指導していただくことになっていた先生の生死を心配していました。大震災で留学プログラムが延長され、同年10月ようやく仙台の地を踏むことができました。

研究生の私は文学部で言語学を研究することになっていたものの、少し悩んでいました。外交官の友人にその悩みを相談すると、彼は「あなたはテーマを変えるべきだ。日本語ができるあなたは国際関係の勉強をしたほうがいい」と率直に助言されました。そのとき目の前に浮かんで来たのは、在日アルメニア大使館で見た、20世紀初頭に領事に任

命されたディアナ・アプカーという女性の写真でした。頭の中で一大変化が起こりました。しかし、次の学期が始まるのに10日間しかありません。もし研究テーマを変えるなら、学部も変える必要がありました。パニックになりましたが、ここでラッキーなことに、そのときたまたま仙台を訪れていた友人が国際文化研究科の鈴木道男先生を紹介してくれました。鈴木先生は当時多元文化論講座に所属されており、「うちの研究科では幅広い研究が行われているよ！」とおっしゃり、私を研究生として受け入れてくださいました。アプカーについては一次資料も文献も少ないため、かなり難しく、「そのテーマでは修士論文さえ書けない。諦めたほうがいい」と多くの人に反対されましたが、それでも私は諦めませんでした。旧多元文化論講座においては、研究生時代、その後の修士課程、そして国際日本研究講座での博士課程において、鈴木道男先生の長きに亘る温かいご指導の下で「修士論文にさえならない」テーマで新しい資料を発見し、博士論文を仕上げることができました。

困難があっても、何を言われても、本当にやりたいことであれば、自信を持って目標を達成することが大事だと思います。



多文化共生論講座

平成31年3月
博士課程前期2年の課程修了

島貫 悟

二年間を振り返って

私が大学院に進学したのは学部時代に柳宗悦の『工藝の道』（1928年）を読み、その思想に感動したことが最大のきっかけでした。当時、工藝や手仕事の問題に強い関心を抱きながらこの本を夢中になって読んでいたうちに、いつしか柳との出会いに運命のようなものを感じるようになってしまったことを、いま懐かしく思い出します。しかし、実際は、もう少し大学に残って勉強を続けたいという、漠然とした気持ちを抱いたというのが本当のところだったようにも思います。

そのように世間知らずで悩むことが多く、現実的な思考に乏しかった私が二年間の課程を無事に全うすることができたのは、指導教員の佐藤透先生をはじめ、研究科の先生方からいただいた厳しくもあたたかいご指導のおかげに他なりません。理系から文系に転向して右も左も分からなかったときに心強く励ましていただいたことを、いま改めて感謝しています。

本当にあっという間の二年間でしたが、多くのことを学んだ時間でした。とりわけ、文献を精読し、学術的な文章を書くための基礎的な訓練を積んだことは、理系出身の私にとって重要な経験でした。また、授業を通じて民族問題や異文化理解の問題をさまざまな角度から考察したことは、世界や自文化について深く考えるきっかけとなると同時に、専門を深めるための土壌になりました。日々多くの留学生と交流し、友情を深めながら互いの文化を学びあったことも良い思い出です。

博士後期課程に進学した現在では、解決すべき問題が明確に見えはじめつつあります。博士論文完成への道程は長いですが、目下の研究に誠実に取り組むことで、一つずつ形にしてゆきたいと思っています。



退職教員からの言葉



多文化共生論講座

教授

山下 博司

来し方行く末—職場のこと、私のこと—

昨年度末を以て東北大学を定年退職しました。それ以前、平成の30年間とほぼ重なる年月を、財団法人東方研究会（現公益財団法人中村元東方研究所）、山形大学、名古屋大学、東北大学と、4つの研究機関・大学に身を置いて研究・教育に携わりました。この間お世話になった同僚の皆さまに感謝いたします。

30年の間、大学の研究環境・教育環境も大きく様変わりしました。山形大学教養部から異動した先の名古屋大学では、教養部廃止をうけて設置された独立大学院の国際開発研究科に所属し、本学に異動後も、同じく国際文化研究科が職場になりました。名古屋大学以降、大学院と併行して全学教育の英語科目を担当するようになり、そのこともあって私の研究・教育の内実も大きな変遷を経験しました。私の専門は古代・中世タミル語による古典文献学です。独立大学院の諸条件を踏まえ、本来の専門分野を半ば放擲するかたちで、6年間の留学体験の下地をもとに現代インドの文化・社会を現地調査を交えて調べるように

なり、またタミル映画の字幕作成の場数も踏んでいたもので、インド映画の研究にも進出しました。近年は南アジア系を中心とする移民研究へも領域が広がっています。「古代」から「現代」への大きなシフトでしたが、意義深い転換でもありました。調査地で民族を問わず多くの人々の知遇を得、またお世話になって今日に至っています。

さて退職したあと何をするか。当面はこれまでの研究を続けることになるでしょうが、暇がほしい時計の針を戻し、途中で放り投げてあった古典学やドラヴィダ諸語関連の仕事にも余力を振り向けたいと思っています。中世タミル語による聖徒列伝『ペリヤプラーナム』（12世紀）の翻訳と出版、現代標準タミル語記述文法の脱稿、マラヤーラム語辞典の完成などがそれです。焦らず取り組もうと思っています。

末筆になりましたが、国際文化研究科のさらなるご発展を祈念いたします。



国際政治経済論講座

教授

葉 剛

経済学は実学か虚学か

私の専門は経済学です。社会科学としての経済学を誤解する周囲の言動に時々胸を衝かれることがあります。例えば、10数年前に中国で友人に不動産売買の将来性についてのアドバイスを求められたこともあれば、日本で外貨を持っている知り合いにいつ日本円に変えればよいかと聞かれたこともあります。満足な回答を得られないような場合、経済学が役立つ学問と揶揄されたこともあります。経済学が金儲けを研究する学問分野と錯覚されているようです。

いうまでもなくもともと経済学は金儲け学問ではありません（馬場宏二、2003年）。但し、経済学が、社会の直面している問題を解決する方法を知りたいという実践的意図（正村公宏、2006年）をもつことは広く認識されています。政策運営、金融ビジネス、国際経済の枠組みなどに少なからぬ影響を与えている（伊藤元重、2004年）現状から、経済学が実学の側面を有することに異を唱えるわけにはいきません。

それと同時に、経済学が現実の経済現象の根底にひそむ本質的な要因を引き出し、経済社会の基本的な運動法則（宇沢弘文、1989年）を見出す側面をもっています。また、経済学には理論と実証という二つの側面がありますが、理論と実証との関係が必ずしも自然科学のように整然と類型化されるものではなく、一人一人の経済学者の独特な洞察力と厳しい論理力に依拠する（宇沢弘文、同上）ところが経済学の特徴です。

しかし、経済学（特に新古典派経済学）は現実との緊張関係が希薄で、現実の社会経済から遊離した演繹理論—数理モデルが主流となっている（伊東光晴、2015年）ため、空虚なもの（ジョン・ロビンソン、1987年）となったという批判を受けています。したがって、経済学が自己疎外されずに現実の経済社会—特に経済のグローバル化、金融危機以降の激動な世界経済—を見つめつつ社会とともに歩む学問体系を自ら再構築することを切望してやみません。



新任教員紹介



国際環境資源政策論講座

准教授

泉 貴子

2019年4月より国際文化研究科国際環境資源政策論講座の協力教員となりました泉貴子と申します。現在、東北大学災害科学国際研究所地域・都市再生研究部門国際防災戦略研究分野に所属しております。国際防災、国際人道支援、国際協力などを中心に研究しています。

2013年4月に東北大学に着任するまでの約15年間は、国連機関や国際NGOに勤務していました。特に、2004年のインド洋大津波の発生後は、国連アチェ・ニアス復興調整官事務所にて、インドネシア政府、国連機関、NGOなどの支援機関が行う復興の調整業務に携わりました。その間に、防災の重要性を実感しました。自然災害の発生は防ぐことはできませんが、様々な対策により被害を軽減することは可能です。

現在も、マレーシアにてJICA草の根技術協力事業

「地域コミュニティの暮らしと安全の向上のための災害リスク評価に基づく防災力強化プロジェクト」を実施しています。このプロジェクトでは、マレーシアのスランゴール州において自治体と住民主導で防災活動ができるような体制を構築し、人材育成、コミュニティ防災活動の実践を目指しています。

また、環太平洋大学協会 (Association of Pacific Rim Universities - APRU) のマルチハザードプログラムディレクターとして、環太平洋地域50大学と連携し、防災の教育・研究・国際的議論への参加を強化する取り組みを推進しています。

このような経験を基に国際文化研究科で学ぶ学生たちと共に、国際的視野をもちながら、それぞれに関心のあるテーマや課題について、ともに考え、学んでいきたいと思えます。



国際政治経済論講座

准教授

土屋 陽一

はじめまして、土屋陽一と申します。2019年4月、国際政治経済論講座の准教授として着任いたしました。千葉県出身で、大学学部は東京、修士課程は大阪で過ごしました。修士課程を終えた後、企業に3年間勤務しました。研究への関心が捨てられず、大学院へ再度入学しました。バッファロー（米国）で学位を取得後、研究者としてのキャリアを始めることとなりました。前任校である東京理科大学では、マクロ経済学や経済予測に関する授業を担当しました。

これまで、経済予測に関する研究を中心に行ってきました。予測研究は、予測モデルの構築と予測評価に大別されます。私は後者の評価に関心があり、調査機関、エコノミスト・アナリスト、国際機関などが公表する予測の特性を明らかにすることを

行ってきました。経済主体が作成・発表する予測の特徴を踏まえた、経済モデルを構築することが大きな目標です。

最近では、予測者間における相互依存性に関する研究を行っています。調査機関やエコノミストは多くの同業者と競争する環境にあるため、戦略的に行動する誘因があります。どのような環境下で戦略的行動が生じるか、また、どのような戦略的行動を誘発するかを明らかにすることを目指しています。また、他分野との境界領域や他分野の手法を経済学に応用することに取り組んでいます。機械学習、グラフ理論、情報幾何学に関心があります。国際文化研究科は様々な分野の研究者から構成されていますので、共同研究を積極的に行っていきたいと考えております。



国際環境資源政策論講座
助教

大窪 和明

2018年12月に国際文化研究科国際環境資源政策論講座に着任いたしました大窪和明と申します。2019年春に始まりました災害科学・安全学国際共同大学院も兼務しております。生まれは茨城県で、東北大学工学部に入学してから本学大学院情報科学研究科で修士号、博士号を取得したのち、東北アジア研究センターに勤務した合計12年間に仙台で過ごしました。東北アジア研究センターでは4年間勤務し、その後、埼玉大学大学院理工学研究科、愛媛大学防災情報研究センターに務め、5年半ぶりに仙台に戻って参りました。

研究内容は、道路や公共施設などの社会基盤施設や物流・サプライチェーンのマネジメントに関する現象解明および最適化です。最近では、災害時における緊急支援物資の輸送や、老朽化した社会

基盤施設の維持管理といった将来の不確実性が高い対象について経済学、統計学、数理計画法を駆使した研究を続けてきました。現在は、製品を再資源化するためのサプライチェーンで起きている現象の解明や最適化に向けた研究に取り組んでおります。

国際文化研究科では、様々な専門分野の先生方と交流することができ、非常に刺激的な研究・教育生活を過ごさせていただいております。この恵まれた環境で、より一層、研究・教育に邁進して参りたいと存じますので、ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



最近の著作から



言語科学研究講座
江藤 裕之 教授



『学問こそが教養である』

渡部昇一(著)、江藤裕之(編)
育鵬社、2019(平成31)年4月17日、229頁

『知的生活の方法』(2019年3月で累計119万6000部、講談社現代新書で売上げベスト1)などの著作で有名な渡部昇一先生は、その言論活動から保守論壇の重鎮というイメージが強い。しかし、その本質は一級の知識人であり、世界的にも屈指の蔵書家であり、英語文献学を専門とする学者でもあった。

二年前に鬼籍に入られてからも先生の本は出版され続けているが、この度、先生の学問や教育に関する未刊の論考を整理して出版する機会を得た。ミュンスター大学での名誉博士号授与式での記念講演、上智大学での最終講義、東北大学で開催された英語学シンポジウムでの基調講演、そして不肖私との対談といったレアものが含まれている。

その中で、G. K. チェスタトンのSaint Thomas Aquinas に触れて、いかなる学者の精緻な研究よりもトマスの本質を掴んでいると評され、その「天才」を深く評価されているくだりがある。今回の編集作業を通して、たとえばダーウィンとウォーレスの対比から説く進化論についての論考を読むと、その本質をふつうの言葉でざっくりと言い切っているあたり、まさに先生にもチェスタトンと同じ「天才」が重なってくるように思える。

まさに「学而不厭」の人であった。死後もなおその言説が読み継がれるというのは、佐藤一斎ではないが、「老いて学べば死して朽ちず」ということであろう。



ヨーロッパ・アメリカ
研究講座
野村 啓介 教授



『ナポレオン四代 —二人のフランス皇帝と 悲運の後継者たち—』

中公新書、2019年2月。

まずは、一般読者向けの新書である。日本ではあまり知られていないが、フランスの歴史上、「ナポレオン」と名のつく人物は意外に少なくない。そのなかで比較的好く知られるのは、皇帝になった二人のナポレオン(1世と3世)であるが、おのおの子である2世、4世となると、フランス本国以外ではほとんど無名に近い。

そこで本書では、フランス近代史を彩る4代のナポレオンたちを描くにあたり、三つの側面、すなわち逆境からの復活劇・異邦人としての人格形成・その名のもつ歴史的多義性、という視角を軸に、ナポレオン一族のたどった栄華と奈落を行き来する数奇な運命に注目する。すなわちそれは、ナポレオン4代をひとつの連続する一族の物語として提示しようとする稀有な試みであり、4代の総体史を提示することによって、フランスひいてはヨーロッパの歴史を通観し、一族の視角から近代という時代を読み解こうとするものである。

執筆の開始時期はそれぞれにだいぶ異なるが、くしくも刊行時期が近接したために阿鼻叫喚の地獄を体験させてくれたのが、このたび紹介する二冊である。



『ヨーロッパワイン文化史 —銘醸地フランスの歴史を中心に—』

東北大学出版会、2019年3月。

前書の翌月に刊行された本書は、ワインという飲料を切り口に、ヨーロッパ文化の諸相を歴史学的に考察しようとする構想にささえられる。そのために、古代から現代にいたる欧州史をワインを軸に駆けめぐり、歴史的背景をおさえながらヨーロッパ文化の真髄ともいえるワイン文化のダイナミックな展開に迫るものである。類書がなく、世間によくある趣味の書とは一線を画すユニークな歴史の書となっていることを筆者が自負するのは、いささか手前味噌というべきか。とはいえ、初学者の理解に資する工夫を凝らしつつも、最新の研究成果に裏づけられた解説も要所に散りばめられ、ワイン愛好家のみならず、欧州史学徒にとっても必読の書でありたいものである。

総じていえること、それは、今になって思えば、テーマは違えども、同じく近代という時代の、いわば伝統性と近代性(時としてそれらの虚構性)とでもいえる部分を照射しようとする意図にもつらぬかれていたというべきか。それはともかくとしても、心やすらかな日々を送ろうと思うなら、刊行時期の間隔を適度に空けるべきであるということである。さもなくば、それこそ本当に健康増進法の趣旨とは真反対の境遇に陥ることであろう。せめてもの慰めは、いずれの書も広く手にとっていただけることくらいであろうか。



令和元年度科学研究費補助金採択一覧

7月1日現在

氏名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備考
佐藤 雪野	17H02227	基盤研究B	継	EUにおける難民の社会統合モデルドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題ー	補助金
池田 亮	17H02487	基盤研究B	継	1950年代の中東と北アフリカにおける冷戦と脱植民地化	補助金
岡田 毅	18H00683	基盤研究B	継	大学入試改革を契機とする新しい高大接続英語教育用eラーニングパッケージの開発研究	補助金
大河原 知樹	19H01404	基盤研究B	新	民法、民事訴訟法におけるイスラーム法と中東法の国際比較研究	補助金
Godart Clinton	19H01197	基盤研究B	新	越境する日蓮主義の基礎研究ートランスナショナル・ジェンダー・スピリチュアリティ	補助金
繁田 真爾	19J00772	特別研究員奨励費	新	近代日本における「監獄教誨」成立史の研究ー犯罪・刑罰・宗教ー	補助金・特別研究員(PD)
亀山 光明	19J21102	特別研究員奨励費	新	近代日本仏教と戒律ー宗教言説史におけるプラクティスの再検討	補助金・特別研究員(DC1)
吉田 栄人	16K03213	基盤研究C	継	メキシコにおける多文化主義と先住民の文学的実践	基金
井川 眞砂	17K02534	基盤研究C	継	マーク・トウェイン晩年のユーモアー(笑いの武器)による批評精神	基金・名誉教授
中本 武志	17K02670	基盤研究C	継	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	基金
勝間田 弘	17KT0117	基盤研究C	継	途上国のNGOとグローバル・ガバナンス	基金
勝山 稔	18K00310	基盤研究C	継	民間の視座を導入した中国通俗文学の「自国化」の研究ー受容文化の多角的戦略ー	基金
市川 真理子	18K00365	基盤研究C	継	近代初期イギリスの商業劇場における楽屋正面壁の構造と使用方法に関する総合的研究	基金
高橋 大厚	18K00520	基盤研究C	継	言語における経済性条件の再検討	基金
Jeong Hyeonjeong	18K00776	基盤研究C	継	外国語学習を通じた情意や社会性の育成:認知神経科学からの検証	基金
杉浦 謙介	18K00820	基盤研究C	継	外国語eラーニング教材の仕様最適化ー学習効果・使用者評価・学習実態に基づく研究ー	基金
志柿 光浩	18K00820	基盤研究C	継	大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発	基金
野村 啓介	18K01021	基盤研究C	継	第二帝制下フランス外交の異文化経験と極東戦略に関する基礎研究	基金
大窪 和明	18K04392	基盤研究C	継	点検情報の価値を考慮したロバスト最適点検・補修計画モデルの開発と適用	基金
青木 俊明	18K04382	基盤研究C	継	潜在的限界集落地区における社会的ネットワークを活用した生活の質の維持・改善	基金
堀田 智子	18K12418	基盤研究C	継	日本語学習者のヘッジ表現の習得過程ー中間言語語用論の観点からの考察ー	基金・GSICSフェロー
周 振	18K12440	基盤研究C	継	中国語学習を支援するためのデータベースの構築	基金・GSICSフェロー
山下 博司	19K00075	基盤研究C	新	シンガポールにおける民族集団の多元的共存と宗教・文化政策ー宗教間関係を焦点にー	基金・名誉教授
鈴木 美津子	19K00439	基盤研究C	新	ロマン主義時代の文学作品に見られるウォレン・ヘースティンズ表象	基金・名誉教授
藤田 恭子	19K00490	基盤研究C	新	多言語性の否定と肯定ールーマニア・ドイツ語文学に見る言語アイデンティティの諸相ー	基金
小野 尚之	19K00679	基盤研究C	新	名詞から動詞をつくるー事象統合による語彙創造のしくみ	基金
黒田 卓	19K01012	基盤研究C	新	イラン系ムスリム知識人がみた近代世界	基金
渡邊 竜太	19K01049	基盤研究C	新	チェコ/ドイツ国境地域における20世紀地域社会史	基金・GSICSフェロー
勝間田 弘	19K01519	基盤研究C	新	ASEAN外交と国際関係の理論	基金
山内 玲	17K13405	若手研究B	継	アフリカ系アメリカ文学におけるカリブ海文学・思想の受容と影響に関する研究	基金
帆北 智子	17K13555	若手研究B	継	近世ヨーロッパの貴族世界と政治・外交ネットワークに関する基礎研究	基金・GSICSフェロー
妙木 忍	17K17596	若手研究B	継	医学的なまなざしと女性の身体ー解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究ー	基金
KLAUTAU Orion	17K17601	若手研究B	継	村上專精の基礎的研究	基金
土屋 陽一	18K12775	若手研究	継	国際機関予測の評価と民間経済主体への影響に関する研究	基金
佐藤 正弘	19K13674	若手研究	新	市場を介した消費者間の影響関係のネットワークがイノベーション普及過程に及ぼす影響	基金
中山 真里子	19K14468	若手研究	新	日英バイリンガルのL2表記表象の解明	基金
佐野 正人	16K18476	挑戦的研究(萌芽)	継	東アジアにおける戦後歴史認識の横断的研究ー戦後初期と1990年代を中心にー	基金
池田 亮	16KK0071	国際共同研究 加速基金 (国際共同研究強化)	継	中東・北アフリカとアジアにおける冷戦と脱植民地化の相互作用の比較研究(国際共同研究強化)	基金



キャリア講習会

国際文化研究科では、毎年、修了生を招いて就活や仕事の話を話していただくキャリア講習会を実施している。ここ数年は、研究機関と一般企業に就職した方に一年毎にお願いしていたが、昨年度は11月14日に目黒志帆美さん(石巻専修大学人間学部助教)と村松諭さん(株式会社ディスコ)の両名にお越しいただいた。まず、目黒さんから「私の研究生生活を振り返って—M1から大学教員までの道のり」というタイトルで、大学院に入学してから現在の仕事までの10年間の体験をお話しいただいた。それまでジャーナリストとして活躍されていた目黒さんが仕事を辞める決断をしたところなどは印象的であった。次に、村松さんからは「自由な挑戦と自己実現」と題し、文系出身のご自身が技術開発に携わっていきなで、それを支えるチャレンジ精神を語っていただいた。重要な選択において、純粋さや関心という心の持ち方が大切だという点は参加者も感銘を受けていたようである。(江藤裕之)



第25回公開講座 「国際文化基礎講座」 『世界で今何が起きているか』

一般市民を対象にした第25回公開講座を平成30(2018)年11月10・17日に開催しました。政治や環境問題などに関する昨今の国際情勢について本研究科教員2名が講演しました。

10日の講演では、国際政治経済論講座の勝間田弘准教授が「東アジアの国際関係と日本外交の戦略」という題目のもと、近隣諸外国と日本の関係、日本の従来の外交政策とこれからとるべき政策への提言などを論じました。メディアでも現在進行形で取り上げられる話題で、講演後は熱い質疑応答が交わされました。

17日の「世界の食料問題と水資源」という題目の講演では、国際環境資源政策論講座の佐藤正弘准教授が、世界の食料問題の過去から現在までの推移を水資源という観点と絡ませながら講義しました。環境問題という身近な話題が論じられ、参加者は大変興味深く聴講されていました。

トピックが身近であったことや、学生の講習料を無料にしたことなどもあり、中学生(!)・高校生を含めた若い方の参加が目立ちました。(高橋大厚)

外交講座 「アジアにおける日本外交」

2018年10月24日、外務省より高橋直樹氏(外務省アジア大洋州局地域政策参事官室地域政策参事官)にお越しいただき、「アジアにおける日本外交」というテーマでご講演をいただいた。この研究科主催の外交講座は外務省のご協力をいただき毎年実施していたが、一昨年度は日程調整が難しく休会となったため2年ぶりの開催となった。アジア地域からの留学生も多く在籍する本研究科では、わが国のアジア外交のあり方には多くの学生が関心をもっており、昨今のわが国を取り巻く政治・経済、そして学術交流も含めアジア地域の重要性はますます高まっていることから時宜いになったテーマであった。講師の先生からは、アジアにおける日本の基本的な外交活動についての説明だけでなく、ご自身のこれまでのキャリアから外交官という仕事についてユーモアのこもったお話もいただいた。外交の最前線で活躍される方の経験を交えたお話を直接に伺ったことは聴衆にとって大きな刺激になったようである。(江藤裕之)



入学を希望される皆様へ

春季入学試験は、令和2年2月13日(木)、14日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/admission/information.html>をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科 教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

